



スポーツ選手

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

プロ野球界に名を残した剛速球投手ビクトル・スタルヒン、社会人野球で活躍した名捕手久慈次郎。2人は日米野球大会でバッテリーを組んだ日本を代表する野球選手でした。そして偶然にも40歳の若さで急逝します。一方、大相撲の名寄岩は大関に昇進するものの、持病に悩まされ十両直前まで陥落、その後みごとに間協復帰を果たす不屈の力士でした。

スタルヒン テレビを見た同級生が発奮

ロシア生まれのビクトル・スタルヒンは1925年、一家で日本へ亡命し、旭川に移り住みます。1934年旭川中学（現旭川東高校）を中退し、巨人軍の前身、大日本東京野球倶楽部に入団。1939年に年間最多の42勝を挙げ、1955年には通算303勝を樹立、日本プロ野球史上初の300勝投手となりました。華々しい記録を残したものの、引退して2年後の1957年、自動車事故で亡くなります。

旭川中学の野球部メンバーで同級生の西条敏夫は、スタルヒンと「スタル」「トシ」と呼び合う仲でした。1978年1月、HTBのテレビ番組「あゝプロ野球」が2回にわたって特集した「あゝスタルヒン物語」を見ていました。その感想が2月12日の北海道新聞「読者の声」に載っています。

「私はスタルヒンの晩年と、悲惨な交通事故死を思

い涙した。四角い柱一本に「スタルヒンの墓」と書かれた寂しい墓標を見て、私は真の同期の桜として、彼のためせめて小さな記念碑を旭川市のどこかに残してやりたいと決意した」

この情熱がかつての仲間を動かししました。野球部OBの旭中野球クラブと旭中30期の同級生が同年春、スタルヒン顕彰像建設期成会を結成。会長には旭中野球クラブ会長の小林健造が就任、西条は事務局メンバーとなり実務を担います。

趣意書には「冬期間の長い旭川では野球にとっては最悪の条件と言える中で、スタルヒンの如き大投手を生んだことは真に旭川の誇りである」と書いてあります。

地元の月刊誌「北海道経済」1978年11月号によると、9月に開いた旭中野球クラブの臨時総会で、西条が各方面との交渉経過などを報告。立像建設資金800万円のうち100万円ほど集まったが、同年中に少なくとも300万円、翌年10月までには全額をそろえる必要があるため、クラブ員全員が1人最低10万円を募るほか、大口の寄付集めも強力に行うことを申し合わせます。

この記事は期成会については一言も触れていません。募金活動を行っているのは旭中野球クラブだという誤解があったかもしれません。臨時総会を開いたの

が旭中野球クラブではなく期成会だとしても、寄付集めが芳しくないことに変わりはありません。

その後、西条がどれほど努力したか、期成会の収支決算書を見ると一目瞭然です。実行委員ら16人が個別に集めた寄付金は、10万円に満たない人もいる中、西条は最高額の163万円にのぼりました。その次に多かった人は50万円ですから、桁違いの驚くべき額です。

目標としていた大口寄付も実現。スタルヒンがかつて在籍していた巨人軍からは100万円の寄付、旭川市からは250万円の補助金を得ることができました。この結果、最終的には目標額を上回る1千万円が集まります。

制作を請け負ったのは札幌在住の彫刻家本田明二。巨人軍時代の21、22歳のスタルヒンをモデルにし、マウンド上で投球に入る直前、ボールを頭上にかざす姿を表しました。

「彼の温かな人柄を出して欲しい」という期成会の要望から、「一番ピッチャーらしく彫刻としても安定する。それに何よりも彼のやさしさを表現出来る」(北海道新聞1979年1月1日)と考えました。



優しい表情がのぞくスタルヒン像



銅像の背後にあるのはスタルヒン球場

そして顔の表情は、スタルヒンの娘ナターシャがアトリエを訪ねた際、父と似ていることから彼女の写真を撮り、制作の参考にします(同2010年11月12日)。

除幕式は1979年10月7日、旭川市総合体育館前庭で行われますが、像が台座に取り付けられたのは、ぎりぎりの前日夕。本田と西条は作業中、像となってよみがえったスタルヒンが西日に輝く印象的な光景を感慨深く見つめていました。

西条は寄付集めのため何度も上京しました。死後、妻の和子は「まさに命懸けで駆け回っていました。多くの方の協力のおかげで像が完成したときは、感無量だったと思います」と振り返っています。

市営球場は改築に際し1982年9月、名称を「スタルヒン球場」と変更。日本で初めて人名を冠する球場となりました。これに伴い、銅像も1983年秋、スタルヒン球場の正面に移設されます。

同球場は2000年以降、高校野球北海道大会の会場となり、甲子園を目指す球児たちをスタルヒン像が出迎え、激励しています。

久慈次郎 監督が考えた記念事業

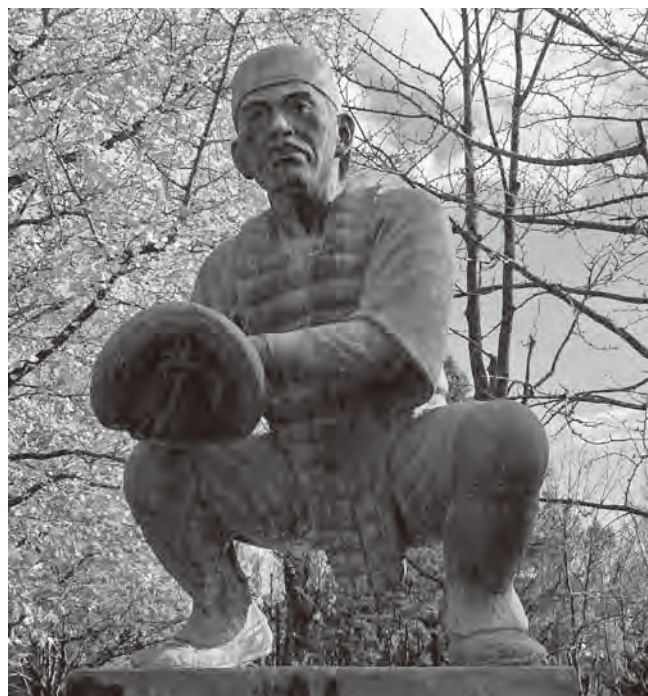
岩手県生まれの久慈次郎は早稲田大学卒業後、1922年函館太洋(オーシャン)倶楽部に入団し、捕手として都市対抗野球などで活躍。1931年と34年の日米野球大会では全日本の捕手兼主将に選ばれ、沢村栄治やス

タルヒンをリードします。ところが、不幸なことに1939年8月、札幌市円山球場で試合中、敬遠されて一塁へ歩こうとした久慈のこめかみに、二塁走者をけん制しようとした捕手の球が直撃し命を落としました。

1977年は函館大洋倶楽部創設70年という節目の年。監督の高石健三は新年早々、記念事業として何をすべきか逡巡^{しゅんじゆん}していました。その結果、思い至ったのは久慈を顕彰することでした。

こうと決めたら行動は迅速でした。記念碑建立の協力を求められた函館東高校（現市立函館高校）野球部OB会会長の寺井省吾^{じゐ しょうご}はこう述懐しています。

「今年二月、オーシャンクラブ高石監督とOBの東島（寿）さんが、故久慈次郎選手の記念碑を造りたいと思うのだが、と相談に來られました。私たちの住む街はこだてをこよなく愛する一市民として、またスポーツマンの一人として、計画の意図がすばらしいので、即座に同意をし、微力ながら協力を約束しました。早速、オーシャンクラブ理事長の成田（勇司）さんに趣旨を説明にうかがい、ご指示により期成会を発足させる事となり、有志の方と協議の上、会長を前商工会議所会頭の田中誠一郎さんをお願いしたところ、快く



捕球姿の久慈次郎像

お引き受けいただきましたので、三十人の幹事で四月に期成会が発足されました」（北海道新聞函館版1977年8月11日）

故久慈次郎選手顕彰碑建立期成会の事務局は商工会議所に置き、400万円を目標に募金活動を開始。寺井は事務局長として実質的な責任を担います。

「いざ資金集めに動いてみますと、久慈さんのことなら、と快く協力していただいた方がほとんどです。五百円、千円と小遣いの中から出していただき、会社や各スポーツ団体は五千円、一万円と決して豊かでない財源の中から協力していただきました。ご年配の方からは戦前のオーシャンクラブの活躍ぶりや、久慈選手のことなど数々のエピソードを懐かしそうに話していただきました。またご送金いただいた方の中に、かつてオーシャン全盛時の選手の名がたくさんありました」（同）

寺井の活躍に対し、高石は「私自身躓^{つまず}きそうになったことも数多くあったが常に、日産サニー函館店常務取締役、寺井省吾氏の深い御指導のもと、なんとか実現をみることにになった」と感謝しています。

出来上がった銅像は腰をかがめた捕球姿勢で、右打者の外角低めにミットを構えています。制作したのは富山県在住の砂原放光。プレートには元巨人軍監督、水原茂の筆で「球聖久慈次郎選手の像」と書かれています。像の横にはボール型の副碑も添えられました。

除幕式は1977年8月14日、千代台公園野球場正面で行われ、遺族11人が一緒に幕を引きました。その列の先頭には、父の死後まもなく誕生し、父と同じ名前を付けられた長男次郎がいました。

久慈の銅像が完成した2年後の1979年、旭川にはスタルヒンの銅像が建てられました。1982年には旭川市営球場が改修され、スタルヒン球場と名を変えます。

これが函館の人たちに影響を与えたのか。千代台公園野球場が1994年5月にリニューアルオープンする際、函館市教育委員会が市民から愛称を募ると、半数近くが久慈にちなんだものでした。

しかし、最終的に決まったのは「オーシャンスタジアム」。市議会では「初めからオーシャンありきだったのでは」という批判も出ましたが、決定が覆ることはありませんでした。

銅像は改修工事に伴い、球場正面から少し離れた三塁側の緑地に移設されました。

名寄岩 郷土への貢献に感謝し

小樽で生まれ、名寄で育った岩壁静夫は1932年、大相撲の立浪部屋に入ります。親方の意向が絶対の社会ですが、岩壁は親方が考えた四股名に納得しませんでした。愛着のある名寄と自分の名前をとって「名寄岩」にしたいと申し出ます。親方はそれを許し、意志の強さから「こいつは出世する」と期待を掛けました。

1937年に幕入りを果たし、1943年には大関に昇進します。しかし、腎臓病と糖尿病の悪化から入退院を繰り返し、前頭14枚目まで転落。背水の陣で臨んだ1950年5月場所で9勝6敗の好成績を上げ、敢闘賞を受賞します。この時のエピソードが後日、「名寄岩 涙の敢闘賞」という映画になり、全国で感動を呼びました。

再起を目指す名寄岩は1952年9月場所で2度目の敢闘賞に輝き翌年、関脇復帰を果たしますが結局、1954年9月場所を最後に引退します。

親方となってからも郷土愛は強く、1962年には名寄市に市民会館設備資金として30万円を寄贈。1968年には寄付した100万円を基に、市が生活困窮者を支援する「名寄岩基金」を創設しました。

こうした功績を顕彰しようと銅像建設の話が持ち上がったのは1980年。翌年は名寄岩が他界し10年になることから、市内に賛同の輪が広がります。

大関名寄岩顕彰像建立実行委員会が発足したのは1980年11月。それを伝える名寄新聞(1980年11月29日)は「道北の小都市・名寄の名を全国に広めた、郷土の名力士『名寄岩』」と紹介しています。

組織の代表となる勸進元には市長の石川義雄、観光協会会長の名取忠夫、商工会議所会頭の中山正泰ら6



土俵の前に立つ名寄岩像

人が就任、事務局を商工会議所に置きました。建設場所は名寄市スポーツセンター前庭、除幕式は「涙の敢闘賞」を受賞した5月とする方針を決めました。

制作は富山県高岡市在住の田淵吉信に依頼。30歳ごろの写真をもとにし、化粧まわしは名寄岩後援会から贈られたものを再現しました。像は高さ1.8メートル、幅1メートルとほぼ等身大の大きさです。

当初は大口篤志の寄付に頼っていましたが、1981年4月からは一般公募も行い、最終的には目標の1千万円を集めることができました。

除幕式は1981年5月29日に行われ、夫人のチエ子や立浪部屋の親方(元関脇安念山)らが出席。遺族らの手で幕が引かれると、両手を握りしめ、前方をじっと見つめる直立姿勢の名寄岩が現れました。

10年後の1991年には銅像の背後に土俵が造られ、「郷土の名力士」は願ってもないロケーションの中で、より輝きを放っています。

(敬称略、肩書は当時のもの)

<参考文献>

- ・旭川市広報広聴課「こうほう旭川市民」旭川市、2016年5月号
- ・函館大洋倶楽部編「育め伝統」函館大洋倶楽部、1978年
- ・名寄市北国博物館編「名寄岩物語—砂付けて男を磨く相撲とり」名寄市北国博物館、2014年